
Liebestr?ume

相良 マミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L i e b e s t r ? u m e

【Nコード】

N 5 2 9 2 T

【作者名】

相良 マミ

【あらすじ】

ピアニストを目指す高校生の若菜。

師事する先生に厳しく怒られた明くる日、音楽室で……。

「あなた、自分の音ちゃんと聞いてる？」

ぱしん、という音が防音室に響いた。

僅か四畳半ほどの狭い部屋。窓のない無機質な白いコンクリートの壁と重々しい鉄のドア。硬いの床の上には吸音し過ぎないように設えられた絨毯が敷かれている。その小さな部屋の中央にはグランドピアノが堂々と鎮座していた。部屋の大半を占めていると言っていい。その黒く艶やかに光る開いた筐体の蓋に、部屋の照明を映していた。

そのグランドピアノと壁の隙間と言うべき鍵盤の前に、若菜と中年の女性が並んで座っていた。

若菜は小さな身体を固くすると、きゅっと唇を結んで、今その女性に叩かれたばかりの左手の甲を擦った。女性が続ける。

「楽譜の通り音符を追っても意味ないのよ？ 間違えずに弾いても、意味ないの」

若菜は幼い頃からずっとピアノとともに育ってきた。母は生まれてきた我が子の手を見るなり、ピアニストの手だと確信したらしい。確かに掌からは長く細い指が真っ直ぐに伸びていて、『ド』から一オクターブ高い『ミ』まで楽に届くほど。関節の稼動域も広い。小柄な身体つきはピアノには向かないと言われるが、それは彼女なりの努力でカバーしてきた。今では腕立て伏せも軽く二十回はできる。そして母の直感の通り、もともと才能もあったのだろう。未だ十六になったばかりではあるが、その運指の技術は大人も目を見張る物がある。今やショパンやリストといった高い技巧を必要とする曲であっても、不自由を感じさせることなく弾きこなせるようになって

ていた。

若菜自身、将来は音楽の道へ進むことを既に決めている。

その第一歩として、この春からプロのピアニストを教えるような高名な先生に師事することになった。そして今日がその第一回目のレッスンだったと言うのに。

ため息をつくのは、あれからもう何度目だろうか。既に誰もいなくなってしまった教室で、若菜は一人頼杖をついて窓の外を眺めていた。

今日の高校の授業は全然身に入らなかった。一夜明けた今でも、あの後先生がお手本として演奏してくれた音が耳に残っている。本当に同じピアノから出ている音なのかと疑いたくなるほどに、先生の奏でる音は全くの別物だった。技術云々の前に、まず音が違うのだ。

「私の音には足りない物がある、か……」

先生に評された言葉を呟き、若菜はまたため息をついた。

時計はもう五時を迎えようとしている。それを見て若菜はようやく立ち上がった。

「練習しよ……」

若菜は最後にもう一つため息をつく、机の横に提げたかばんを持って教室を後にした。

下駄箱に向かう途中、若菜は音楽室の扉が開いているのに気がついた。何気なく中を覗くと、グランドピアノが夕日を受けて緋色に染まっているのが見えた。

若菜は引き寄せられるように音楽室に入り、ピアノの前に立った。誰が忘れたのか鍵盤の蓋が開いている。若菜は右手を鍵盤の上に置き、音の一つだけ鳴らしてみた。高い音が音楽室に響く。若菜は表情を僅かに歪めると、椅子に腰掛けて左手も添えた。そして、一つ呼吸すると弾き始めた。

リストの『愛の夢』第三番。今、若菜が練習している曲だ。

若菜は無心で弾き続ける。最後の一音が消えたとき、音楽室の入
り口から拍手が聞こえてきた。弾かれたように若菜が振り向くと、
そこには見知らぬ男子生徒が立っていた。眼鏡をかけていて典型的
な優等生のような容姿だ。しかし表情とその身に纏う雰囲気は柔ら
かい。

「上手だね。でも、勿体無い」

若菜は眉根に薄く皺を寄せて、その男子生徒を見つめ返した。名札
には常盤と書かれている。その名を見て若菜は思い出した。同じ学
校に、やはり音楽の道を目指している先輩がいるという話。その先
輩の名前が、確か『常盤』だ。

常盤は微笑みを絶やさず若菜のすぐ隣まで近づいてきた。

「君のピアノは歌ってないみたいだ」

「歌う？」

若菜が聞き返すと、常盤は頷いた。

「そう。ピアノって生きてるんだ。それに曲を弾いて欲しいんじゃない。歌いたいんだよ。そして歌わせてあげられるのは弾き手だけ
なんだ。」

その曲の原曲名知ってる？」

常盤の質問に若菜は首を横に振った。常盤はにっこりと笑う。

「『愛しうる限り愛せ』」

常盤はそう言うと言盤に触れた。若菜が席を離れると空いた椅子
に座る。そして今若菜が弾いたばかりの曲を奏で始めた。

若菜は目を見張り、その指の動きを、腕の動きを、身体の動きを、
表情を、余すところなく見つめた。常盤は柔らかく瞳を閉じ、微笑
を湛えている。

それにしても、ああ、なんという音なのだろう。優しく流るる風
のような、穏やかに降り注ぐ太陽のような、聴く者を自然と笑顔に
し、心地よくさせる。甘い願い、微かな不安、幸せな想い、溢れる
喜び、慈しみ、それはまさに――愛する者への歌。

曲が進むにつれ、若菜の瞳の輝きが増し、頬が上気する。息をす

るのも瞬きをするのも忘れて、若菜は彼の歌に聴き入り、酔いしれた。

「すごく優しいメロディだろう？」

歌い終わると常盤はそう言い、若菜を見上げた。若菜は黙って頷く。その表情には、先ほどまでの暗い影が見当たらない。目をきらきらさせたまま、顔を綻ばせている。

若菜は立ったまま鍵盤に手を置いた。一つだけ音を奏でる。

その音色がハミングとなって大気に溶けた。

(後書き)

ここまでお読みくださいましてありがとうございました。

もしよろしければ、感想などいただけるととっても嬉しく
思います。

もちろん「読んだよ」のご報告だけでも嬉しいです♪

＊ ＊ ＊

無言ダンテ様が主催された『創作五枚会』に便乗参加した作品です。

テーマ／歓喜

禁則事項／心理描写禁止

(初出…2011／02／05)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5292t/>

Liebestr?ume

2011年6月7日08時25分発行